200 培養甲状腺細胞へのヨードの取り込みを指標とした甲状腺刺激物質の測定

笠木寛治、飯田泰啓、小西淳二、御前 隆、
新井圭輔、中島鉄夫、遠藤啓吾、鳥塚莞爾
（京大 放核）

バセドウ病患者血中に存在するThyroid Stimulating Antibodies(TSAb) の測定法として培養甲状腺細胞内のcAMP産生を指標とする方法が現在広く用いられている。今回ラット甲状腺cell line 、FRTL-5細胞を用い ^{125}I摂取に及ぼすTSH 、TSAb等の甲状腺刺激物質の影響を検討した。

TSH を含まないCoon's modified HAM F12 medium中で8－10日間培養したFRTL-5細胞に甲状腺刺激物質を加え、さらに72時間培養した後、 ^{125}I約50,000 cpm を加え、1時間後に細胞に取り込まれた放射能を測定した。

1 dish (2.0 cm^2 、5 × 10^5 cells) あたりの ^{125}I摂取率 (0.9-1.5%) は10μU/ml bovine TSH 添加により 1.5－ 2.0倍に、 100μU/mlでは4－6倍に増加した。forskolin 、dibutyryl cAMPも ^{125}I摂取率を有意に上昇させた。バセドウ病患者血清よりPEG (15%) にて抽出した粗グロブリン分画を用いた場合、19例中14例に有意の ^{125}I摂取率の上昇が認められた。このようにして測定されたTSAb活性とcAMPを指標として求めた活性との間には有意の相関関係が認められた。(n=18、p<0.001 、r=0.891) 。

201 バセドウ病におけるTBII活性値の術後変動（第2報）特に末梢リンパ球subsetとの関連において

星 竹敏，石井芳正，大森勝寿，渡辺岩雄
（福島医大 二外）

私達は先の本会において、TSH 受容体抗体とされるTBIIの活性値変動を、バセドウ病の術前術後において臨床的に検討して報告した。TBII 活性はsmithのkitを用いて+15%以上を陽性としたが、この活性値自体がそのbiological effectを直接表現しているかについては問題がないとは言えないが、バセドウ病の術後で活性値が術前陽性例において、漸減して陰性化に向かう例とその経過中に再上昇に転ずる例とがあり、しかも後者において再燃をみることが多く、臨床的にはこの活性値変動は意義を有している。この際、活性値の低下については甲状腺残置量との関連が窺えるが、私達の成績では相関はみられなかった。そこで今回、私達は免疫学的機構からこの活性値変動に関与すると思われるリンパ球の動何を、末梢血中リンパ球subsetと組織学的な甲状腺組織内へのリンパ球浸潤態度から検討を加えた。対照としての一般外科において、末梢リンパ球subset(OK-series)の distributionは術後1週以降は術前と同じになるが、バセドウ病の術後においてはOK-seriesの distribution はOK-Ia1についてはやや低い成績を得たので、その意義について言及する

Presented by Medical*Online